

感情の交錯がみえる。

私も彼女のようにひとり、この村に入って食事をし、自分の眼でこの村を見てきた。彼女は私を止めたけれど、私はその後、この村の小学生の家に移り住むことにした。同じ鍋のヤシ油の料理を食べながら、私はこれからこの村の人たちに、どのように溶け込んでいくのだろうか（写真3）。



写真3 滞在先でご飯を食べる

タイにおける大学での仏教教育

泉 向日葵*

2019年1月1日、私はタイ北部にあるチェンマイ県で新しい年を迎えた。近年の私の年越しは、ごく一般的で定例化していた。31日夜に年末番組を深夜まで鑑賞し、年が明けた1日はコタツの中で年始番組を鑑賞する。そうして迎える新年を数年経験してきたが、今回はこれまでの人生で最も印象深い年の始まりとなった。2019年最初の日、私は友人家族に連れられある場所に向かっていた。

タイの宗教

研究対象国の宗教が何であるか。これは研究内容に関係なく存知すべき情報のひとつで

ある。タイにおいては国民の9割以上が仏教徒であり、国王も仏教徒でなければならぬことが憲法に定められているほどである[日本タイ学会 2009: 24]。タイに滞在していると、あらゆる機会に仏教国であることを痛感する。たとえば、首都バンコクの高架鉄道（BTS）の優先座席の表示には、妊婦や老人同様に僧侶が対象となっている。また街を歩けば、至るところにワット（寺院）が建立されており、その数には驚かされる。では国民の大半が仏教徒であるタイでの仏教実践はいかなるものか。

そもそもタイの上座仏教は二重構造をもつとされる。ひとつは、特権的な出家者のみに

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

救いを約束する理知の宗教であり、ブッタの教えを実践する修行者たちの集団の宗教である。もう一方は、出家者に帰依する民衆の宗教である [石井 1991: 128]。本稿では後者に着目し、民衆の宗教実践について掘り下げることとする。

功德（ブン）を積む（タン）

タイの仏教観の支柱となる基本思想のひとつに、「人間はすべてある状態のあいだに行なった善行と悪行とのいわばバランスシートをもっているのであって、その生存の状態が終了したあと、つまり死後の運命は、その直前の帳尻によって決定される」という考え方があり [石井 1991: 108-109]。この思想では、善行の結果として得られる功德（ブン）が人生を左右する。タイの民衆は、「ブン」の大きさを現世における幸福の度合の相関として捉えている。たとえば、金持ちや地位の高い人を褒めるのに、あの人は「ミー・ブン」（ブンをもっている）と表現する。「ブン」をもっているのが、今の幸福な状況がある、との解釈だ。多くの「ブン」があれば、現世で幸福を獲得し、「ブン」が少なければ不幸になる。それがタイの民衆の考え方である [石井 1991: 114]。「ブン」に対する民衆の思考が理解できたところで、新たな疑問が湧き上がる。どのように「ブン」を生み出すのか。幸福をもたらす行ないがあるのならば、実践したいのが私を含めた人間の正直な気持ちであろう。

「ブン」とは神から与えられるものではなく、みずから生み出すものであるとされる。

そしてその「ブン」を生み出す行為を「タンブン」という [石井 1991: 116]。「タンブン」の中でも最上とされるのが、ワット（寺院）の建立であるが、民衆が比較的安易に行なうことができるものも多い。今回の渡航でのチェンマイ県の友人宅での滞在では、思いもよらず新年最初の「タンブン」を経験することとなった。

元旦のビンタパート（托鉢）

1月1日の朝から私が向かっていたのは、ワット ター マイ イという寺院である。朝7時前という比較的早い時間に到着したせいか、人はまばらであった。到着後しばらくすると僧侶による法話が始まり、それが終わり托鉢の時間になると、到着時の静寂がうそのように周囲は民衆で溢れかえった（写真1）。8時頃には民衆は寺院近くの橋に整列し、鉢を抱えた僧侶がその列の横を通り過ぎていく。僧侶の持つ鉢には、民衆からの供品が次々と入れられる。鉢が供品で溢れかえるたびに、僧侶の周辺を歩く在家の補助者によりビニール袋に供品が移し替えられる。こういったように数名の僧侶が私の前を通り過ぎていった。

写真からも分かるよう、この日多くの人々が早朝から集まった。その人の数から、いかに民衆が「タンブン」の価値を評価し、僧侶に帰依しているかが理解できる。彼らの「タンブン」への情熱は、供品の準備段階からも感じられた。31日の夕方、友人宅では1日の托鉢に備え、供品を準備していた。供品に特に決まりはないようであったが、友人家族



写真1 橋の上に溢れかえる人々

の場合は、封筒にいった現金、缶ミルク、粉末飲料、米であった。粉末飲料や米は小分けにし、それらを1セットずつ袋にいれ、最後に袋を紐でしばった。通常はこれで完成であろう。しかし友人家族はその後、袋をしばった紐をナイフを使用し丁寧にカールさせていた（写真2）。この手間にこそ、彼らの「タンブン」に対する情熱、信頼、仏教への尊敬を読み取れる気がした。

自然に許容される宗教教育

思い返せば、私が「タンブン」の思想や方法を知ったのは2015年である。当時首都バンコクにあるチュラロンコン大学に留学していた私は、タイ文化に関する授業を履修していた。その授業の一環で、「タンブン」を授業外で行ない、活動内容をプレゼンテーションする課題が出された。私と友人らはバンコクにあるワット タートンという寺院を訪れ、お手洗いの清掃を行なった（写真3）。

国立大学での仏教教育、甚だ不自然である。国民の9割が仏教徒とはいえ、大学在籍者全員が仏教徒とは限らない。しかし大学



写真2 2018年12月31日に用意した托鉢用の供品



写真3 タンブンとしての寺院清掃

では平然と仏教について語られ、仏教観に基づく行為が課題として課せられる。日本では考えられない。というのも日本国憲法では「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する」ことを前提とし、「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教活動もしてはならない」という政教分離の原則〔辰村 1983: 18〕が設けられているからである。したがって宗教に関する教育は違憲であり、日本人が不自然に感じるのは当たり前である。大学での仏教教育は日本では不自然とされるが、タイでは学生が疑問を抱くことなく、仏教教育

が遂行されていた。現地に滞在すると、日本との相違を感じる場面に多々遭遇する。本稿での私の経験はその一片にすぎず、異郷でのさまざまな新発見こそがフィールドワークの醍醐味である。

引用文献

- 石井米雄. 1991. 『タイ仏教入門』めこん.
日本タイ学会. 2009. 『タイ辞典』めこん.
辰村吉康. 1983. 「日本国憲法上の政教分離原則について一箕面市忠魂碑移設訴訟判決を素材として」『岐阜大学教養部研究報告』19: 17-37.

A Tale of Three Feral Dogs in the Annapurna Base Camp Trail, Nepal

Sese MA*

Annapurna Base Camp Trail

The Annapurna Conservation Area is the largest protected area in the Annapurna mountain range of the Himalayas. It covers 7,629 sq mi and ranges in altitude from 790 m to 8,091 m. Its rich topography results in a complex landscape. Inside the conservation area, the Annapurna Base Camp Trail represents one of the most popular trekking routes in Nepal. It takes 7-12 days to complete, with the Annapurna Base Camp (4,130 m) as the final destination. The trail is spectacularly regarded as it is surrounded by four major Himalayan peaks, namely Annapurna I (8,091 m), Annapurna South (7,219 m), Machapuchare (6,993 m) and Hiunchuli (6,441 m). It is relatively easy to

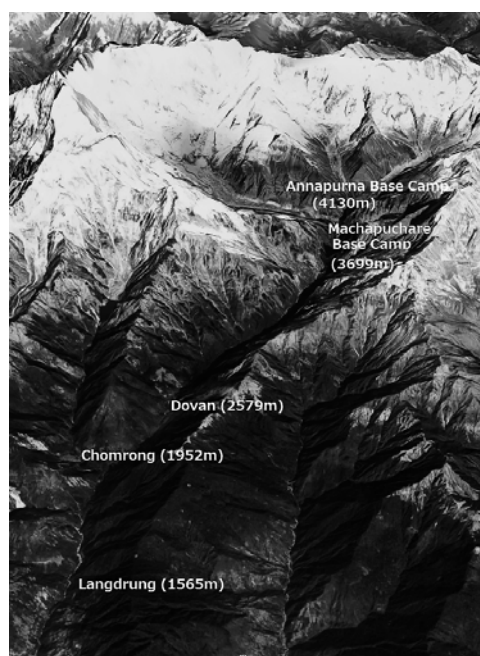


Fig. 1. Annapurna Base Camp Trail

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University